

わからないことをはっきりさせて授業に臨もう

－予習の仕方を身につけよう－

開倫塾

塾長 林 明夫

1. 中間試験も終了し、本格的に勉強に取り組む時期になりましたので、教科書の勉強の仕方、とりわけ予習の仕方を今日は考えてみたい。

予習は何のためにするのだろう。それは、わからないところをはっきりして授業に臨むためだ。問題意識をもって授業に臨むためにこそ予習はしなければならない。

では、どのようにしたらわからないところが明確になるのか。まず、教科書をたんねんに1ページから読んでみよう。読んでいくときには、おっくうがらないで、科目ごとに必要な作業をしてみよう。

2. 科目ごとに必要な作業とは何か。例えば、

(1) 数学なら、教科書をまず読み、次に例題を解き、練習問題、応用問題等教科書にのっている問題をみんな解いてみる。そうすると、どの問題もできるわけではなく、できないものもある。理解しにくいところもある。そんなときには、教科書に書かれている内容や教科書にのっている問題のうち、どこまでが自分によく理解できて、どこからが自分によく理解できないかを明確にすることだ。頭のしんが少しいたくなるくらい考えることも時には必要。参考書はそのあと開くととてもためになる。学校で授業をきくようなつもりで、参考書の解説を読み例題をやってみるとよい。少しはわからない点が減ってくるかも知れない。1冊で足りないと思ったら、もう1冊参考書をひもとくのもよい。さらにわかるところがふえ、わからないところが減るかもしれない。友だちに相談するのはそのあとでいい。自分で教科書を読み、わかるところとわからないところを明確にし、もしわからないところがあれば先生の講義をきくつもりで参考書を1、2冊ひもとく。さらにわからなかったら友だちと議論する。予習とはそのようにするものだ。

授業をきくのはそのあとがよい。問題意識をもっているから、スッと授業に入っていける。何が大事かがよくわかっているから大事なところはききのがさない。質問というのはそれでもわからなかったらするものだ。予習もせず少し調べればわかるような余り安易なことを質問するのは、教え手に失礼でもある。エチケットに反する。

(2) 英語なら次のようにすべきだろう。教科書をもったら、1課ごと体あたりすべきだ。まず1課を通して読んでみよう。最初は声を出して読むのが一番よい。何のはなしかわかればしめたもの。ヒアリングテープがあったら1行ずつポーズでとめ、あとについて読んでみよう。1課全部よく読めるようになるまで5～6回練習しよう。何回も声を出して読んでいるうちに、その課に何が書いてあるか、うっすらとわかる。1行1行意味を考えるのはそのあとがいい。何回もテープについてひたすら読んでよく読めるようになったら、1行1行意味を考えること。ただしわか

らない単語があってもすぐに辞書をひかないこと。文の前後関係で意味を推測するといいい。中学生の場合はイラストが教科書に書かれているのでそれが参考になる。少し英語が得意な中学生や高校生なら、やさしい英英辞典で単語の意味は調べること。(英英辞典というのは英単語の意味が英語で説明されている辞典のことです。中学上級から使えるものが何種類もあるので、少し大き目の本屋さんで気に入ったものをさがすとよい。)英和辞典でもいいけれど、余りうすいものや、余りこまかな活字のものはよくない。意味が少ししか出ていないし、目が悪くなるもとだから。調べた単語の意味はノートに書いておくとよい。(ただし単語ノートはたえず読みまくること。一度ノートに書いたままでは、ノートが覚えているだけで少しも頭には入らないから。)

辞書をひいても十分その文の意味がとおらないところは、わからないところとしてチェックしておく。1課のすべての文章をこのように勉強していくと、共通してわからない文型や、言いまわしが登場するはずだ。それが新出文法事項や構文といわれるものだ。(ただし、最近の辞書は説明がていねいなものが多いので、辞書を調べるだけでそれらがすべてわかってしまうことも多い。)参考書をひもどくのはそれからでよい。参考書の目次やさく引を使って新出文法事項をさがし出し、一気にその章を読むとよくわかる。参考書に出てくる新出文法事項の基本構文はすべて覚えるとよい。開倫塾の英語科で作成した和文英訳練習ノートのようなものを自分で作って書きこむのもよい。新しい文法事項を勉強していく中でわからない点をさがすこと。どこまでよくわかって、どこからがよくわからないかを明確にすることが英語でも大事だ。もう一冊参考書を見たり、さらに大きな辞書にあたることも必要だ。十分調べてもわからなかったら友だちと議論してみよう。そして又考える。授業に出てよいのはこれまたそのあとだ。英語の教科書を、テープを利用し完全に読めるようにし、意味もやさしい英英辞典やあつめの英和辞典を使い調べ、その課で共通のわからない新出文法事項や構文を参考書を1～2冊使い調べ、参考書の基本文をノートを取り覚え、それでもわからなかったら友人と議論し、それから始めて授業に出る。

耳をそばだてわからないところを集中的にきくとよい。それでもよくわからなかったら質問をしよう。質問とはそのようにするものだ。ろくに調べもしないで質問するのは、エチケットに反すること、数学と同じ。

(3)国語だって数学や英語と同じだ。教科書をじっくり読みこんでみるのがまず最初。できれば、教科書の文が引用されているもとの文、つまり「原典」を各作品ごとにさがし出し、1冊通して読んでみることをおすすめする。教科書のうしろには大体出ているし、少し大きめの本屋さんや、大きめの図書館に行けばたいがいおいてある。なかったら、本屋さんや図書館司書の方に相談するとよい。よろこんで手助けして下さるはずだ。教科書にのっている作品は原典をさがし出しみんな読んでしまおう。作者が気に入ったら、授業に入る1か月位前からその作者の作品ばかり、かたっぱしから読んでしまおう。古典だってたいがいいたいそう詳しい注釈や、訳がついているから、それをたよりに読んでしまおう。訳だけ読んだって、全部1冊読むと読まないのとでは大ちがいがいだ。お気に入りの古典が出てきたら大成功だ。原典を1冊読んでよくわからないところをさがし出し、それをチェック。授業中真剣に先生のはなしをきこう。ゾクゾクするほど国語が面白くなること間違いなしだ。友だちにもこんな勉強の仕方をすすめると、よい勉強のライバルだけでなく、本当の親友ができる。(英語が得意な人は、古典を英語に直してみるのもおもしろい。代表的な古典の最初の1～2行でも、出てくるたびごとに英作文してみてごらん。古文と英文の対照表を作っておくとよい勉強になる。一生わすれないほどだ。)

(4) 社会も、わからないことを明確にしてから授業に出ることは今までの科目と全く同じ。地理なら、教科書を読み、地図帳や各種資料統計にあたり、肉付けをする。地名や位置を確認しながら覚えこむなどは当然授業前になすべきこと。わかりにくい用語は地理辞典をひけばすべて出ている。図書館や本屋さんにはカラー版の参考書が山とつまれているし、各地紹介ビデオは日本、世界問わずたくさん出ている。経済好況と円高が原因した旅行ブームで、旅の本は日本、世界問わずこれまた山のように出ているので、各地を勉強する前に、その土地を旅行するつもりで各地めぐりの旅の本を買い求めるとな面白い。お金に余裕があれば旅行社を訪れクーポン券を買い、各地を訪問することだってできる。

歴史も同様。歴史マンガ、歴史ビデオ、歴史の物語も山ほどあるので、何か一つきめて教科書を読む前に一通りその時代のことをイメージで頭の中に入れるのも面白い。ある程度画像でその時代のことが頭に入ったらおもむろに教科書をひろげ、じっくり読みこむ。年号は必ず年表にあたり、歴史を流れとして理解する。地名はこれまた必ず歴史地図にあたり確認。史料が出てきたら、史料集でめんどうがらずに確認。意味がわからないところはチェック。

地理も歴史もこのようにていねいにていねいに勉強してもわからないところを明確にしてから授業にのぞんで下さい。社会が必ず好きになります。

3. 「わからないところを明確にしてから授業にのぞむこと」は、中学・高校だけでなく、大学や大学院にすすんでからも更に大切な勉強方法となります。少しずつその方法を身につけ「本格的な勉強」の準備をしましょう。